

毒

1. 昔はドクグモ

南米にタランチュラというクモがいますが、ヨーロッパの別種のタランチュラも毒グモと信じられていたことから、この一群を日本ではドクグモ科と分類していました。しかし、他のクモより強い毒を持つわけではなく、習性から1973年8月コモリグモと改称されました。

この習性とは、白い卵囊を腹の下につけて動きまわり、孵化した後は子グモを腹部の背側に乗せたまま活動することです。「子守」をしているようだと思われ、擬人化してコモリグモと命名されました。卵囊とは、卵塊を糸で包んだもので、形態はいろいろですが、生みっぱなしもあれば、親が保護するものもあります。

コモリグモは網を張らない、地上徘徊性の種で、畑や草原、湿地に生息する種が多く、山地にもいます。土の色に似せているため地味な色彩です。数十匹の子グモを付けた親は、遠目に見るとブツブツした体に見え、近くでよく見て子グモとわかります。卵囊をつけた個体はわかりやすいので、春から夏の地面も注意して観察してみてください。少しの環境の違いでも生息する種が異なることが体長や模様で見取れます。



ヤマトコマチグモの巣

クモは、餌とする昆虫をおとなしくさせるため捕獲するとすぐ毒を注入します。その後消化液を注入して消化物を吸収します。毒は、昆虫の神経への毒であり、脊椎動物には効果がありません。例外的にハチ毒と同じセロトニンを含む毒をもつゴケグモやコマチグモは、毒グモといわれています。

卵囊を腹に付けた
コモリグモの1種

2. ナガバハエドクソウ

花もまばらな細い花穂を伸ばした地味な多年草です。葉も生気がない緑色の集団を作っていて、存在感がないのですが、この時期花が気になる変な草です。

遊歩道の路側にポツリポツリと生えています。地面近くに節間が短くまとまっている葉は、毛があるため光沢が無いのです。先端から下側の葉腋2~3個から花穂を伸ばして花をつけます。葉の大きさに対して小さい花と長い花穂は撮影しにくい対象です。下から順に咲き上がる無限花序で、



花



萼と鉤

どこかの花が開花していますから長い間花を見ることはできます。小さい花ですが、筒状の花弁の先端は分かれています。萼も筒状ですが先端は分かれ、上部の3つに分かれたものは茶色で先端が曲がり鉤かぎとなっています。秋に熟した実はこの鉤で衣服に付いて運ばれる「ひっつき虫」となります。斜めに伸びた長い果穂、イノコヅチそっくりな下向きについた実は、動物にくっついて運ばれるための最適戦略だったのです。



葉



花穂

ハエドク(蠅毒)の名称は、全草に含まれる毒をハエの幼虫=うじを殺すために使ったり、煎じた汁を蠅取り紙に塗ったりしたことからとされています。蚊取り線香の除虫菊、アセビのうじ殺しのよう

に植物毒も利用されていました。